

## 真理と知

### ——フッサールとレヴィナスの真理概念——

小手川 正二郎

#### はじめに\*

『全体性と無限』（1961年）のなかで、レヴィナスは次のように述べている。

内面的で主観的といわれる道徳性は、普遍的かつ客観的な法則が担いえず、そうした法則が求めているような役割を担っている。真理は、主観的な次元において存在しえないのと同様に、圧制においては存在しえない。真理が存在するのは、ある主体性が真理を語るよう求められる場合、詩編作者が「塵は、あなたに感謝するでしょう、あなたの真理を語るでしょう」と叫ぶような意味で、真理を語るよう求められる場合のみである<sup>1</sup>。(TI 274)

神学的な主張と見紛うこの引用文を哲学的に理解することは、難しいように見える。レヴィナスは、真理が主観的な次元においては（dans le subjectif）存在しえないと述べながら、真理の存在を真理が何らかの主体性（une subjectivité）を通じて「語られる」場合に限定している。これは矛盾した主張とはならないのか。また、真理を語る主体の必要性を持ち出すことで、レヴィナスは真理の客観性を孤立した主体の体験領域へと縮減してしまっているのではないか。あるいは真理を発話主体と対話相手（他人）の関係の派生物とみなしてしまっているのではないか。もしそうである

---

\* フッサール、ハイデガー、レヴィナスの著作の引用には、以下の略号を用いる。引用に際しては、邦訳を参照しつつ拙訳を提示した。

**Edmund Husserl** LU: *Logische Untersuchungen, Husserliana XIX/2*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1984.

**Martin Heidegger** SZ: *Sein und Zeit* (1927), Tübingen: Max Niemeyer, 1967. GA: *Gesamtausgabe*, Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann.

**Emmanuel Levinas** TP: *La théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl*, Paris: Félix Alcan (1930), Paris: Vrin 1994. EDE: *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger* (1949), Paris: Vrin, 1988. TI: *Totalité et Infini*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1961, Livre de poche. HS: *Hors sujet*, Montpellier: Fata morgana, 1987, Livre de poche. EN: *Entre nous*, Paris: Grasset, 1991.

1. « La moralité dite intérieure et subjective, exerce une fonction que la loi universelle et objective ne saurait exercer, mais qu'elle appelle. La vérité ne peut être dans la tyrannie, comme elle ne peut être dans le subjectif. La vérité ne peut être que si une subjectivité est appelée à la dire au sens où le psalmiste s'exclame: "la poussière te rendra-t-elle grâce, dira-t-elle ta vérité." »

なら、レヴィナスは真理を諸個人や個人間の関係に相対的とみなす相対主義に与しているのか。しかし、フッサール『論理学研究』（1900/01年）における心理学主義や相対主義への批判を称賛し続け、個人の「知」の客観化可能性を認めない相対主義や懐疑主義に終生批判的であったのは、まさにレヴィナスではないのか。

レヴィナス自身は、自らの主張が真理に対する相対主義や懐疑主義に陥るものではないと考えていた。それどころか彼は、〈他人〉(Autrui)に向けて語るという主体性のありかたこそが、真理の客観性を可能にすると考えていた。しかしながら、レヴィナスにおいて「真理」や「真理を可能にする」とは、一体いかなる意味で言われているのだろうか。このことは必ずしも自明ではない。しばしば研究者たちは、レヴィナスが意味志向(Bedeutungsintention)と直観作用との合致という現象学的真理概念を問い直す形で、「〈他者〉に対して意識が合致しないこと(l'inadéquation)」を問題化したことを強調する(cf. TI 12)<sup>2</sup>。しかし、レヴィナス自身が最初期から精通していた、フッサールの真理概念の徹底性が理解されない限り、レヴィナスによるこうした真理概念の問い直しがいかなる意義を有するのかは解明されないし、そもそもレヴィナスが「真理」ということでいかなる事態を考えているのか、そして彼自身の真理概念がいかなる正当性を有するのかということも問われない。こうした課題に答えるために、本論はレヴィナスの著作に見出される手がかりをもとに、彼の真理概念の前提をなしている考えと論理を再構築し、それが厳密な分析に耐えうるものであるかを検討する。具体的には、まずレヴィナスの真理概念の問題性を改めて提示したうえで(第1節)、フッサール『論理学研究』における真理概念の意義をレヴィナスによる解釈と共に明らかにする(第2節)。次に、レヴィナスがハイデガーによる言表作用の分析を固有のしかたで受け継いでいることに光をあて(第3節)、その上でなおハイデガー的解釈学から距離を取ろうとするレヴィナス哲学において、「知」と「意志」という概念が重要であることを指摘する(第4節)。こうした検討を通じて、最終的にはレヴィナスの真理概念の前提を明らかにし、本論冒頭の引用文を哲学的に理解することを試みる(結び)<sup>3</sup>。

---

2. Jacques Colette, Levinas et la phénoménologie husserlienne, in: *Les cahiers de la nuit surveillée* n°3, Emmanuel Levinas, Paris: Verdier, 1984, p. 22.

3. 本論は、「真理」という問題を考えるために、考察の対象を『論理学研究』におけるフッサールの真理概念と『全体性と無限』に至るまでのレヴィナスの真理概念に限定している。『イデーニ1』以後のフッサールの真理論と『全体性と無限』以後のレヴィナスの真理論に関しては、別稿に譲りたい。レヴィナスにおける現象学の問題受容の趨勢に関しては、拙論「レヴィナスにおける還元の問題」(『フッサール研究』、第6号、2008年、所収)を参照頂きたい。そこで描かれた概略を筆者はなお支持しているが、展開された個々の議論については、より一層深められるべきであると感じている。

## 1. レヴィナス哲学における「真理」の問題

レヴィナスにおける真理概念は、ジャンコーによって引き起こされた、いわゆる「フランス現象学の神学的転回」をめぐる論争において、重大な争点の一つをなしている。ここでこの論争の詳細に立ち入ることはできないが、レヴィナスのうちに現象学の「神学的転回」を見出し、それを批判するジャンコーとレヴィナスの支持者の対立点ないしすれ違いを瞥見することは、レヴィナスの真理概念の位置づけを考えるうえで有益であろう。レヴィナスに対するジャンコーの批判の要点は、レヴィナスが自我と他人の関係を客観的な次元から超越した関係として捉えることで、「計測不可能な」(impondérable)次元で議論を進め、経験を「記述する」ことよりもレヴィナスの提唱する「形而上学」のために経験を「操作する」(manipuler)ことに執心しているという点にある<sup>4</sup>。こうした指摘は、客観化作用や表象へのレヴィナスの批判を性急に現象学の「乗り越え」とみなす、一部のレヴィナス解釈に対してはなお有効であるように思われる。というのも、レヴィナスが現象学のいかなる基準を維持したうえで諸概念の批判を遂行したのかを吟味しない限り、現象学の乗り越えなるものがそもそも何を意味し、なぜ必要であるかは理解不可能だからだ。もしレヴィナスの思想が現象学のたんなる放棄ないし「飛び越え」であるなら、ジャンコーのいうようにそれは「不可能な要請、現象学の位相においては維持しえない要請であり、こうした要請の真理はある別の次元への従属のうちでしか保全されえない<sup>5</sup>」だろう。レヴィナス哲学は「宗教的な独断論」でしかないことになる。

こうしたジャンコーの批判に対して、レヴィナスが享受や受肉した志向性(身体)といった「表象の優位にない志向性」を分析している事実を挙げて<sup>6</sup>、レヴィナスの分析は現象学の諸概念を「脱理論化し」(dé-théorétiser)しており<sup>7</sup>、その限りで狭義の現象学が対象とする理論的領域には留まらないのだと反論することは可能かもしれない<sup>8</sup>。このより穏当な解釈が、あらゆる作用のうちに「意味」(何かがある「として」現出していること)を見出す『イデーニ I』以後の現象学との関連で注目に値するにしても、厳密に言語の「意味」という観点から見ると、レヴィナスがいう「自我と他人の関係」や「真理」をどのような位相に位置づけるべきかという問題は残り

---

4. Dominique Janicaud, *Le tournant théologique de la phénoménologie française*, Paris: Edition de l'Éclat, 1990, repris dans *La phénoménologie dans tous ses états*, Paris: Gallimard, 2009, pp. 75; 81.

5. Dominique Janicaud, *op. cit.*, p. 77.

6. 関根小織『レヴィナスと現れないものの現象学』、晃洋書房、2007年、61-62頁。

7. Jacques Rolland, *Parcours de l'autrement. Lecture d'Emmanuel Lévinas*, Paris: PUF, 2000, p. 342.

8. ギバルは、ジャンコーが「現象学を有限性の実証主義に縮減されたカント主義の一つへと誘導している」と非難している (Francis Guibal, *La transcendance*, in: J.-L. Marion (dir.), *Positivité et transcendance*, Paris: PUF, 2000, p. 210, note 3)。しかし彼は、「広義の」現象学の哲学的正当性それ自体を問題視しているジャンコーの批判に答えているようには思われない。

続ける<sup>9</sup>。ダステュールが指摘しているように、「[...] 表象的志向性には縮減しえない受肉した志向性の発見で満足すればよいのではなく、対象化的志向性の乗り越えがそうした志向性すべてを構成していると首尾よく示すことも必要なのだ<sup>10</sup>」。

上述したようなレヴィナスの支持者も批判者も、レヴィナスが「客観化するまなざしの中立性から手を切っている」と考える点で<sup>11</sup>、本質的な問題を看過しているように思われる。それは、レヴィナス自身が真理について語る際に、対象の客観性の意義を再考し、彼固有のしかたで理論と言語活動 (langage) に特権的な役割を付与し直しているということだ (cf. TI 33; 56)。

確かにレヴィナスは、最初期の著作以来、一貫してフッサールにおける理論の優位や客観化作用の優位を問題視し続け、『全体性と無限』では「志向性の意味と同様に、真理の本来の意味とノエシス／ノエマ構造を変更する」(TI 328) と述べている。しかし、ここで「変更する」(modifier) という語に注意を払わねばならない。レヴィナスは、真理を問題化するにあたって、フッサールの諸概念、とりわけレヴィナスが初期の著作で批判したような諸概念 (表象、客観化作用、理論) を廃棄するのではなく、それらを解釈し直し再編しようとしている<sup>12</sup>。レヴィナスが真理について語る際に主体性の問いに行きつくのは、こうした現象学的概念の問い直しを通じてでありその逆ではない。したがって、レヴィナスの真理概念を正確に理解しようとするなら、フッサールが『論理学研究』『第五研究』、『第六研究』で展開した「真理」をめぐる考察とレヴィナスによるその解釈に立ち戻らねばならない。

## 2. 『論理学研究』における真理概念

『論理学研究』『第六研究』で展開されるフッサールの真理論は、「第五研究」で練磨された諸概念によって支えられている。とりわけ重要なのは、真理概念を「脱主観化」する「志向性」の規定と真理概念の「客観化」を可能にする「客観化作用」の分析である。レヴィナスは、処女作『フッサール現象学の直観理論』(1930年、以

---

9. 対話者としての他人と自我の関係が対話の内容に「先行している」だけでなく、それを「条件づけている」というレヴィナスの根本的主張はいかなる厳密さと射程を有するのか。レヴィナスの主張を鵜呑みにすることなく、こうした問題を厳密なしかたで再考せねばならない。Cf. Micheal L. Morgan, *Discovering Levinas*, New York: Cambridge University Press, 2007, p. 128.

10. Françoise Dastur, *Intentionnalité et métaphysique*, in: J.-L. Marion (dir.), *op. cit.*, p. 129.

11. Dominique Janicaud, *op. cit.*, p. 81.

12. 『全体性と無限』「序文」においてレヴィナスは自らの課題が、現象学によって明らかにされた思惟の構造を「支え」、それに「具体的な意味を取り戻させる」出来事を明らかにすることであると明言している (TI 14)。このような課題に取り組むにあたっては、現象学の諸概念をレヴィナス自身の立場から再把握することが必要不可欠である。『全体性と無限』第二部において、「表象」や「客観化」、「主題化」の検討 (とりわけ TI 182-196) を通じて現象学の諸概念や諸立場の再評価がなされていると考えられる。

下『直観理論』と略記)から、この二つの契機を集中的に論じている。

レヴィナスは『直観理論』において、「志向性」が主観／客観という相関関係からわれわれを解放する概念であることを強調している (TP 70)。志向性は、実体としての主観 (例えば、何らかの心理状態) と実在する物との関係ではなく、端的に対象との係わりかたとして捉えられる。確かに、客観的な (外的な) 視点から見ると、何らかの人物や自我を志向作用の主体とみなしうるが、それらは志向作用に内在的な契機ではない以上、あくまで反省的に振り返った後に志向作用に付与されるものであり、その意味で主観は諸体験のたんなるまとまりでしかない (LU V, § 12, 391)。『論理学研究』第一版におけるフッサールの分析は、作用の主体と作用の対象の關係に視線を向け直す反省的な次元ではなく、志向作用が端的に「体験される」次元を動いている。したがって志向性は、実在する物や反省的に見出される対象との關係ではなく、端的に思念された (gemeint) 対象との關係として特徴づけられる。

レヴィナスにとって、こうした志向性理論の第一義的な重要性は、それが理論的な諸作用 (表象作用、判断作用) だけでなく、従来は「主観的ないし心理学的な状態 (Zustand)」とみなされてきた意志作用や情動作用をあくまで対象との係わりかたとして分析することを可能にしたという点にあった (TP 74-75; 92)。「ある事態のたんなる表象がこの表象の〈対象〉を思念するしかたは、その事態を真または偽とみなす判断のしかたとは異なる。同様に、推測と懐疑のしかた、希望や恐怖のしかた、[...] 等々は異なる」(LU V, § 10, 381; TP 73-74)。注意せねばならないのは、個々の作用の「対象」を規定するには、その作用の性質だけでは十分でなく、フッサールが作用の質料と呼ぶ契機が必要であるということだ。「質料」とは、実在する物や人物 (例えば、歴史上の人物としてのナポレオン) を直示する契機ではなく、ある作用が何らかの物ないし事態をどのようなものとして (als was) 把握するかを規定する、対象指示的な (referential) 契機である (例えば、「イエナの勝者」あるいは「ワートルローの敗者」、TP 89)。あらゆる志向作用は、自らが思念している対象を他の対象から区別し同定するために、この質料という契機を必要とする。

『論理学研究』における「客観化作用」の優位は、志向作用の「不可分な一面」であるこうした「質料」の位置づけを通じて出現する。客観化作用は、「われわれにとって何か狭義の対象となるような作用」(LU V, § 33, 477) として特徴づけられる。客観化作用は、何らかの作用 (例えば、願望作用) を表象して、当該の作用それ自体を客観化するのではなく、何らかの作用によって思念されているもの (願望されているもの) を表象することで、当該の作用に対象との係わりを与える。それ自体は、対象との係わりを持たないような作用性質は、客観化作用と係わることによつてのみ作用質料を有しうる。この意味で、質料の担い手たる客観化作用が、あらゆる

る志向作用一般を基づけると言われる (LU V, § 41, 515)<sup>13</sup>。

志向性の分析における「脱主観化」と「客観化作用の優位」という二つの契機は、フッサールの真理概念の根幹を形づくっている。「第六研究」においてフッサールは、真理を意味志向と直観との「合致」(adequatio)として特徴づけるが (§ 37)、レヴィナスが強調しているように (TP 112)、この合致を単純に主観の認識と客観との同一化として捉えることはできない。ここで問題になっている「合致」とは、意味志向によって思念された対象と直観において与えられた対象との合致である。直観されるものは、単純に与えられるのではなく、「意味志向が思念するものとして、意味志向に適合するものとして」与えられねばならない。これら対象間の完全な同一性は、この同一性を対象とする客観化作用の一つである明証作用において、「客観的なものとして」現出する (LU VI, § 8, 569)。真理論におけるフッサールの直観への準拠は、まさにこの限りで、認識を個々人の感覚や体験に帰す直観主義を免れている (TP 125)。

フッサールが「第六研究」第 39 節で展開している四つの真理概念のうち、こうした明証作用に関わる真理概念もまた「主観的な」性格を有してはいない。そこで論じられる明証作用の側の「真理」とは、個々の明証作用の理念的本質であり、こうした本質は、経験的偶然的な明証作用から独立に考えられるからだ。このようにフッサールの真理概念は徹底して脱主観化されており、フッサールが真理の確証という問題を孤立した主観の体験という私私的で前言語的な領域に閉じ込めているといった批判は当たらない。他人の体験を覗きこむことができないということは、他人によって体験された明証の客観性へ到達する可能性を決して排除しないからだ<sup>14</sup>。

レヴィナスはフッサールにおける真理の脱主観化を高く評価し、心理学主義や相対主義に対するフッサールの批判を重要視している。「自然主義的な心理学や歴史学、経験諸科学でさえ、学の実性を揺るがしたり、学問的生に固有の意味に内在する「永遠の相のもとにある」というこの貴重な性格を揺るがすことはできないだろう」(TP 220)。その一方で、レヴィナスは『論理学研究』における「客観化作用の優位」が非客観化作用の特異性を見えにくくしてしまっていると批判する。「意志作用や欲求作用、情動作用等々は、対象に係わっている。しかし、作用の側面だけが考慮された『論理学研究』の態度においては、こうした諸作用が対象の構成に何を付け加えているのかが見えない」(TP 97-98)。レヴィナスも述べているように (TP 97)、こうした客観化作用の優位は、『論理学研究』において「命題」が第一義的に真偽の性質を担うものとして考察の中心にあったことに由来する。厳密な意味で「表現され

---

13. Cf. Jocelyn Benoist, *Autour de Husserl : l'ego et la raison*, Paris: Vrin, 1994, p. 304; *Entre acte et sens : recherches sur la théorie phénoménologique de la signification*, Paris: Vrin, 2002, p. 249.

14. Cf. Rudolf Bernet, *Intention und Erfüllung, Evidenz und Wahrheit* (VI. Logische Untersuchung, §§ 1-30, 67-70), in: Verena Mayer (hrsg.), *Edmund Husserl, Logische Untersuchungen*, Berlin: Akademie Verlag, 2008, p. 206.

る」のは文の意味である以上、非客観化作用は客観化作用との係わりにおいてのみ自らの「対象」を表現しうる。記述的に客観化されるものだけが表現されるのであり、非客観化作用が有する諸々の機能は、「告知」されたり「伝達」されるにすぎないのだ<sup>15</sup>。レヴィナスは、客観化作用を基軸に据えたこうしたフッサールの表現論があくまで理論的認識の枠内にとどまるものであると考える。「質料によってのみ対象は現れ、質料はつねに客観化作用の質料である。したがって、われわれに現れる実在する世界は、理論的なまなざしに与えられる対象という存在様態を有することになる。現実の世界とは、認識による世界であることになる」(TP 98)。フッサールが「対象の存在をなすものへの通路をただ理論的意識にしか見ていない」(TP 97)というレヴィナスの批判は、『論理学研究』の「形而上学に対する中立性」に鑑みれば、的確なものであるとは言えないかもしれない<sup>16</sup>。ただし、こうした批判の背景をなすハイデガー『存在と時間』の問題枠組みから、レヴィナスがフッサールの真理概念の評価を経たうえで何を受け取っているかを考えることは重要であろう。真理を命題においてではなく世界内の存在者との係わりのなかで捉える『存在と時間』の真理概念こそ、世界における他人との対話という次元でフッサールの真理概念を再考することを可能にするからだ。

### 3. 言表作用と真理——ハイデガーとレヴィナス——

周知のようにハイデガーは、『存在と時間』(1927年)第44節において、『論理学研究』「第六研究」を参照しつつ(SZ 218)、合致としての真理概念の存在論的基礎を探求している。ハイデガーによれば、「真理」は(1)ある存在者がそれ自体に即して見出されている、(2)現存在が当該の存在者を「見出すことのうちで存在している」(entdeckend-sein)という二つの側面から解明される。この二つの側面は、一見すると、フッサールが「第六研究」第39節で述べている三つ目(「思念されたものとして与えられている対象」と四つ目(「志向の正当性」)の真理概念にそれぞれ対応しているように思われる。しかし、言表作用の客観化された「対象」を基軸に据えたフッサールの表現論を世界内の存在者への具体的な係わりという観点から捉え直すことで、ハイデガーは真理概念の理解においてもフッサールのそれから距離を

---

15. Cf. Jocelyn Benoist, *Entre acte et sens*, op. cit., pp. 250–251.

16. 『論理学研究』における「形而上学に対する中立性」という問題と同様に、『全体性と無限』におけるレヴィナスの立場は一筋縄ではいかないものである。Cf. Dan Zahavi, *Metaphysical Neutrality in Logical Investigation*, D. Zahavi and F. Stjernfelt (eds.), *One Hundred Years of Phenomenology. Husserl's Logical Investigation revisited*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 2002. 『全体性と無限』におけるレヴィナスの「実在論的」立場とフッサールとハイデガーの立場との関係については稿を改めて論じる。

取ろうとしている<sup>17</sup>。

まず「見出される存在者」に関して言えば、それを客観化作用によって捉えられる「対象」と同一視することはできない。ハイデガーは、フッサールが「第六研究」の末尾で扱ったアリストテレス『命題論』を取り上げ直し、あらゆる言表作用が真偽という性質を担うわけではないが、どんな言表作用もそれが話題としている存在者、〈それについて語っているところのもの〉(das Worüber)を露わにする(δηλοῦν; offenbar machen)機能を担うと言う(SZ 32; GA 17, 20<sup>18</sup>)。この〈まさに語られているもの〉(das Beredete)は、それについて〈言われたことそれ自体〉(das Gesagte als solches)と明確に区別される(SZ 162)。「このハンマーは重い」という言明は、重いこのハンマーについて語っているが、同一の言われたことを通じて、たんなる述定にも願望にも警告にもなりうる。すでに世界のうちで特定の場を占める〈まさに語られているもの〉は、理論的な対象に還元されえず、個々の言表作用は、この自らが向けられている存在者との関係に依じて、特定の型の言表作用(主張、命令、願望、祈り、等々)として発せられ、理解される。ハイデガーのいう「真理」において見出される存在者とは、理論的な対象に限定されえないこうした〈まさに語られているもの〉であり、それは祈りや願望、欲求といった命題以外の諸作用とも係わり、個々の事実や芸術の「真理」、宗教の「真理」を語る余地を与える(GA 17, 98)。言表作用を〈言われたことそれ自体〉の提示としてではなく、世界との関与を欠くことがない行為(Verhalten, SZ 156)として捉えることで、ハイデガーは「非客観化作用」における〈まさに語られているもの〉との多様な係わりかたから、真理を捉え直していると言えよう。

他方、真理における現存在の「見出すことのうちで存在している」とは、いかなることか。ハイデガーは、言表作用の本質に作用の告知(Kundgabe)という機能を見出している(GA 20, 75–76)<sup>19</sup>。これは、内面的な意志や欲求を外面化するという意味での告知ではなく、言表作用によって現存在の存在しかた(ないし現存在を取り巻く情態性 Befindlichkeit)が、否応なく開示されることを意味する。言表作用に見られる、こうした「自己」のありかたの開示という側面は、主観的な意図や思想の外面化として言表作用を捉えることを避けつつ、言表作用のうちで告知される存在のしかたとして「主体性」を考察するきっかけを与える。真理における「見出すことのうちで存在している」とは、まさにこうした自己の発露(Sichaussprechen)とし

---

17. ハイデガー自身は、『存在と時間』の当該箇所、この点についてははっきりと述べているわけではないが、ハイデガーがいかにしてこうした規定に至ったのかを考察することは極めて重要である。以下の叙述は、『現象学的研究への入門』(1923/24年冬学期講義)、『時間概念の歴史への序説』(1925年夏学期講義)をもとに再構成した。

18. *Einführung in die phänomenologische Forschung: Gesamtausgabe* 17, 1994.

19. *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs: Gesamtausgabe* 20, 1979.

て、それも他人や世界という視点からではなく、自己自身に自己を開示することとして捉えられている (SZ 221)。

レヴィナスは、「真理」を「存在のしかた」とみなしつつ (EDE 67)、多様な存在者との係わりとして言表作用を捉えるハイデガーの分析手法を受け継いでいるように思われる<sup>20</sup>。とりわけ、ハイデガーの分析に見られる非客観化作用を評価する可能性と言表作用のうちで捉えられる存在のしかたとしての「主体性」という考え方は、レヴィナス独自の洞察を考えるうえで極めて重要である。というのもこうした分析は、言表作用を対象指示性 (référentialité) からだけではなく、世界における文脈やその都度の言表作用の方向性 (directionnalité)<sup>21</sup>、言表作用の主体性といった多様な観点から真理を考察することを可能にするからである。

しかし、レヴィナスはハイデガーの考察からつねに距離を取ってもいる。真理という問題に関して言えば、その理由は大きく分けて二つある。第一に真理の「客観性」という問題がある。レヴィナスは、ハイデガーが客観化作用の優位から非客観化作用の特異性を解放している点を評価する一方で、ハイデガーが意味の客観性、真理の客観性という問題を自覚的に回避していることを見抜いている。「まさにハイデガーの哲学において、意味概念の客観性概念からの切り離しがとりわけはっきりしたしかたで成就される。ハイデガーにとっては意味を理解するとは、何がしかの形式のもとで対象へと向かうことではない。理解することは、表象することではない。人間の実存の各状況が理解のしかたを構成している。けれどもそこに客観的な把握はないのだ」(EDE 73)。意味の客観性の問題は、ハイデガーの場合、〈まさに語られているもの〉が〈言われたことそれ自体〉を通じて伝達され共有されるという過程によって説明されるが (GA 20, 362)、こうした説明は個々の現存在によって世界内存在の理解可能性がつねにすでに分かち合われている (geteilt) という解釈学的前提に支えられている (SZ 162)。言表作用はこうした理解可能性の「明示化の派生的な一遂行様式」(eine abgeleitete Vollzugsform der Auslegung, SZ 154) でしかないとするハイデガーに対して、レヴィナスは他人に向けて語を「発する」(proférer) という契機を「意味」の成立にとって二次的ではなく構成的と考える (HS 202)<sup>22</sup>。他人への発話という場面においてこそ、ハイデガーが性急に解消してしまった真理の正当化可能性、真理の規範的性格を具体的に分析することが可能となる。そしてそのた

---

20. すでに『直観理論』において、レヴィナスは「価値的、情動的等々といった述語は、世界の実存に属しており、世界とは単純な表象の「中立的な」地帯ではない」(TP 75) と述べている。

21. 言表作用の「対象指示性」と「方向性」との区別については、Jean-Michel Salanskis, *Sens et philosophie du sens*, Paris: Desclée de Brouwer, 2001, p. 134 を参照。

22. La Transcendance des mots. A propos des Biffures (1949), repris dans HS. ハイデガーの解釈学的意味論に対する厳密な批判は「意味作用と意味」(1964年)という論考においてなされる。この批判については、レヴィナス独自の意味論の定式化とあわせて稿を改めて論じる。

めには、言表作用や主体についてのハイデガーの分析を展開しつつ、ハイデガーが派生的なものとみなした対象性や客観化作用にその意味を取り戻させねばならない（この点については第四節で詳述する）。これがハイデガー的問題設定を引き受けながら、フッサールによる真理概念の脱主観化を維持し続けようとしたレヴィナスの課題であったように思われる。

他方レヴィナスはハイデガーとともに、世界との係わりのうちにつねにすでに投げ入れられている主体が、そうした係わりを廃棄して「自己自身によって完全に自らを認知する」ことはできないと考える（EDE 137）。しかし、ハイデガーがこうした洞察から、意志や主体性といった概念の解体へ向かうのに対して、レヴィナスは自由の担い手としての「意志」という概念を言表作用のうちで捉え直すことで、相対主義や歴史主義に陥らないしかたで「知」の主体性を考えようとした。

#### 4. 真理と知

まず、第二の点から考えていこう。一見すると、真理の問題を考える際に、意志や主体性という概念を導入することは極めて奇妙であるし、そうした举措には、フッサールが心理学主義や相対主義から解放しようとした真理概念を再び危険に晒しているという嫌疑がかけられるだろう。しかしながらレヴィナスが導入しようとする主体性は、ハイデガーが形而上学的主体概念として批判した、あらゆる作用を貫いて存続する基体（*subjectum*）としての主観でも、各々の表象に随伴しうような空虚な形式としての主観でもない。レヴィナスが主体性ということで問題にしようとしているのは、世界との様々な係わり（理論、行為、享受等々）において捉えられる自我のありかた、ある人が特定の行為においてその行為の主体（自我 *Moi*）として認められるしかた、つまり行為者の「主体化」という事態である（EN 39）<sup>23</sup>。こうした主体化という問題をレヴィナスは、「自我と全体性」（1954年）で<sup>24</sup>、知に対するある種の懐疑論との対立を通じて検討している。

この論考でレヴィナスは、社会学者や精神分析家を一種の懐疑論者に見立てて議論している。彼が問題とする懐疑論とは、もし各人の個別性が社会学の法則や精神分析によって網羅的に説明されうらなら、それぞれの「私」が語ることはすべて社会的関係や性格分析の結果とみなされ、コギトの確実性や意志の自発性を語る余地はなくなってしまうというものだ。「人はもはや語りえない。それは、われわれが対

---

23. レヴィナスの二つの主体概念（内面性としての主体と言語活動のうちでの主体化）を考えるうえで、伝統的な主体概念へのハイデガーの批判をレヴィナスがどのような形で継承し、乗り越えようとしたかという問題を避けて通ることはできない。この問題の一端については拙論、*L'intériorité et la choseité du sujet: le cartésianisme lévinassien*（『フランス哲学・思想研究』第15号、日仏哲学会、2010年、所収）で検討した。

24. *Le moi et la totalité*, in: *Revue de métaphysique et de morale* n° 59, 1954, repris dans EN.

話者を無視しているからではなく、われわれがもはや対話者の言葉を真剣に受け止めえないから、対話者の内面性をたんなる付随現象とみなすからだ」(EN 36)。ここでレヴィナスは、独断的なしかたで社会学や精神分析を非難しているのではなく、「私」が思っていることを「私」は知っているという素朴な前提に対する懐疑論に直面している。もし人が自らの人格性を失い、「私」一般と化してしまうなら、「人は自らが考えていることを知ることなく考えている」(on pense sans savoir ce que l'on pense, EN 37) ことになる。レヴィナスは、考えることと知ることを区別している。レヴィナスにとって「知」は、たんに思考された「非人称的な言説」(EN 38)、知る者の関与を欠いたたんなる「情報」ではない。それは、特定の「私」が自ら考えていることとして保持すること、より正確に言えば「私」が自ら考えていることとして対話者に「主張するないし言い張る」(claim; prétendre) ことだ<sup>25</sup>。「私」が語を發することなくあくまで内面的なしかたで「考える」ことができるのに対して、「私」が何かを「知る」ことができるのは内面的なしかたではありえない。「私の知」が存立しうるのは、發話者が「私」の名のもとに何かを主張する場合、それも他ならぬ「私」の名のもとで語ることを許すような者、すなわち対話者としての他人に向けて主張する場合である。これがレヴィナスによる「知」の理解であると考えられる<sup>26</sup>。

「私」の主体性や「私の知」は、それらを要求する意志が他人に示される限りにおいて存立する。このように主張するレヴィナスは、主体の人称性が即自的に与えられていると考えることも、「知る」という理論的活動が主体の世界への関与から独立した純粹に思弁的なものであると考えることも拒否している。この点でレヴィナスは、ハイデガーが言表作用のうちに見出した二つの側面、すなわち「自己のありかたの告知」と「世界内の存在者との関与」という問題系を引き継いでいる。しかしレヴィナスは、(1) 他人に対する主体化という側面と(2) 世界における理論の特徴を際立たせることでハイデガーの分析をより具体的でより豊かなものにしていく。まず第一に、ハイデガーが自己自身の自己への開示を本来の開示の様態とみなしていたのに対して、レヴィナスは他人への發話(parole)を言表作用の本質的契機とみなすことで(EN 46)、發話者の主体化における「他人に対する」という契機の重要性に光をあてる。言表作用のうちでの主体化は、一方で意志の自発性による要求(「私の」知の要求)なしでは生じえない。しかしそうした自発性は他人との関係においてのみ何らかの方向性を有し、他人に対してのみ主体化され正当化可能なものとなる。このような連関において対話相手としての他人は、發話者の語る内容や思

---

25. Cf. Stanley Cavell, *The Claim of Reason. Wittgenstein, Skepticism, Morality and Tragedy*, Oxford: Oxford UP., 1979.

26. レヴィナスは、こうした知の理解を端的に合理主義(rationalisme)と呼んでいる。「合理主義は、自らが考えていることを知らずに思考し、夢を見るように思考するたんなる詩的な思考を告発することから始まる」(EN 44)。

惟の対象とは異なつたしかたで与えられる。「言語活動による関係は、思惟と思惟に与えられる対象を結びつける関係には還元されない。言語活動は、他人を組み入れられない。というのも、われわれはいま他人という概念を用いているのだが、他人は概念としてではなく、人格 (personne) として呼び求められるからだ」(EN 46)。レヴィナスは発話者の人称性が他ならぬ対話者に対して主体化される関係を人格的關係とみなし、そこで発話者の主体化を可能にするというよりもむしろ要求する他人を人格としての〈他人〉(Autrui) と呼ぶ。発話者と対話者の非対称的關係に基づくこうした主体化の構造は、あらゆる言表作用に共通するものではないにしても端的に主観的なものでもなく、特定の言表作用、とりわけレヴィナスが考えるような「知」に不可欠な構造として考えられる。

レヴィナスは、言表作用におけるこの主体化の構造、対話者としての〈他人〉との対面 (face-à-face) を「真理の条件」と呼ぶ (EN 48)。それは「反駁しえない何らかの真理、精神分析にその都度委ねられている「確実な言表」ではなく、一人の対話者、一人の存在という絶対者であつて、諸存在を対象とする真理という絶対者ではない。対話者という絶対者は、真理として肯定されるのではなく、信じられる。ここで信ないし信頼とは、知識の第二の源泉を意味するのではなく、あらゆる理論的言表が前提としているものなのだ」(EN 42)。レヴィナスが真なる言表の内容から区別している「信」(foi) を知と対立する(知を欠いた)信仰と同一視してはならない。レヴィナスがいう「信」とは知の主体の成立にあたって、「私」が絶対的な確信をもたないまま、〈他人〉に「私の知」を差し出し、その判定を委ねることを意味する。その意味で信は知と矛盾するのではなく、むしろ「私の」知の客観化を促す<sup>27</sup>。

ここにおいて、ようやく真理の「客観性」が問題となる。レヴィナスは、『全体性と無限』で存在者の「対象性」へのハイデガーの過小評価を問題視している。「[ハイデガーにおいては] たんに現れるもの、「純粋な対象性」、「対象的でしかないもの」は、自らの意味を実践的な目的連関に借り受けている以上、そうした目的連関の残余でしかないことになる。そこから観想に対する気遣いの優位、世界の「世界性」に触れ対象が現出する地平を開く理解のうちへの知識の根づきが生じる […]」(TI 95)。レヴィナスは、ハイデガーによる非客観化作用の再評価を引き継ぎつつも、客観化作用を世界においてあらかじめ理解されているものの分節化とみなす解釈学的発想を拒否する<sup>28</sup>。対象性は世界との実践的な連関(適在性連関)から派生するもの

---

27. このような「信」の理解は、アウグスティヌスが語る「信」と多くの共通点を有する。この点は、アウグスティヌスの信の理解を支えるプラトンの「善」のアイデアをレヴィナスがいかに解釈しているかという問題とあわせて考察されねばならない。Cf. Augustinus, *De magistro*, 11, 37: « Quod ergo intelligo, id etiam credo, at non omne, quod credo, etiam intellego; omne autem, quod intellego, scio, non omne, quod credo, scio. » Cf. *Confessiones* X, 23, 33.

28. こうした解釈学的発想が真理を問題化する際に向き合わざるをえない諸困難については、荒畑靖宏『世界内存在の解釈学』(春風社、2009年)第6章が詳細に検討している。

ではなく、言語活動を通じた他人との人格的關係に不可欠である、事物との固有の係わりかたである。われわれは概念の一般性を通じてのみ世界を主題化し、他人と世界について語り合うことができるからだ。「意味する者である〈他人〉は、自己についてではなく世界について語ることで、この発話において現出する。〈他人〉は世界を呈示することで、世界を主題化することで現出するのだ」(TI 98)。

この「主題化された世界」の重要性は、どれだけ強調してもしすぎることはない<sup>29</sup>。真理と知という問題系にとって主体化や〈他人〉といった契機がどれほど重要であろうとも、主題化された世界について語るなかで自我と〈他人〉の人格的關係が成就される以上、「真理の条件」はこの關係において語られる言表の内容と無關係ではありえない。世界を主題化し一般化可能な対象として語ることは、対話相手たる〈他人〉と意味づけられた世界を共有することで、「私の知」を批判ないし正当化する次元を開くことを意味する (TI 189)。世界をめぐる自我の発話、「私の知」が正当化される次元においてこそ他人との人格的關係が「存在する」のだ。

「対象性が定立されるのは、世界を呈示する対話において、すなわちある〈間での保持〉(entre-tien)においてである。この呈示は、体系、秩序、全体をなしていない二つの地点の間で保持される」(TI 97)。レヴィナスは、知の客観化可能性をあくまでも知の主体が生起する対話のうちで保持しようとする。対話においては、知の客観化可能性は、あくまでも何らかの文脈のうちでしか問題とされえないが、その文脈、客観化可能性が展開される筋道は、言表作用の主体と他人の關係によって方向づけられ、限界づけられる。こうした連関のなかで、レヴィナスが復権させている諸概念(表象、主題化、対象性)と、主体化の契機におけるレヴィナスの細かな区別(他者 l'Autre、他人 autrui、第三者 le tiers)の意義が問い直されるべきである<sup>30</sup>。

## 結び

本論でわれわれは、レヴィナスの「知」の理解をもとに、彼が真理の問題を「対話」の次元で展開していることを見た。言うまでもなく、こうした「知」の理解は、プラトン『パイドロス』における「知」と「情報」の区別に由来する。プラトンは

---

29. レヴィナス自身、例えば「[他人]の顔を見ることは、世界について語ることである」(TI 190)といった言い方でこのことを度々強調している。しかし従来のレヴィナス研究においては、この事実は十分に吟味されてこなかったように思われる。この点に関して、レヴィナスがいう「倫理」(自我と他人の關係)が「政治」(発話を正当化する次元)に移行する必然性を重要視する以下の試みは傾聴に値する。Laszlo Tengelyi, *Gesetz und Begehren in der Ethik von Levinas*, in: B. Waldenfels, I. Därmann (hrsg.), *Der Anspruch des Anderen. Perspektiven phänomenologischer Ethik*, München: W. Fink, 1998, p. 166.

30. レヴィナス哲学における「信」と「知」の關係および他人 (autrui) と〈他者〉(l'Autre)の区別の重要性については、以下の拙論を参照。小手川正二郎「理性と意志——レヴィナス哲学における意志論」(『哲学』、日本哲学会、2011年、所収)。

『パイドロス』(276a)で、語り手も文脈も欠いた「情報」に対して、魂を有した語りの優位を説いている。レヴィナスはこの区別を練り直すことで(TI 70)、真理の問題のうちに知の主体という概念を導入し、真理を発話のうちでの主体化として捉え直すと同時に、知の客観化可能性をまさにこの主体性との係わりのうちで保持しようとしたのだと言えよう。

いまやわれわれは、本論冒頭の引用文をよりよく理解することができる。対面としての真理は、主観的な次元においても、意志の自発性が生起しない場面(圧制)においても存在しえない。真理が「存在」しうるのは、〈他人〉の面前で主体化された自我が世界について真なる言明を語る場合のみである<sup>31</sup>。

---

31. 本稿は、2010年3月28日第9回フッサール研究会(於関西大学飛鳥文化研究所)で発表した原稿を基にしている。発表時および発表前後に貴重なご意見を賜った諸氏、とりわけ論文アドバイザーを務めて下さった村上靖彦先生、植村玄輝氏に深謝いたします。